

<p>広川町 < 稲むらの火の館 ></p> <p>全戸配布</p>	<p>< 稲むらの火の館 ></p> <p>や か た だ よ り</p>	<p>第51号</p> <p>H26・7</p>	<p>稲むらの火の里</p> <p>濱口梧陵生誕地</p>
--	--	--------------------------	-------------------------------

< 梧陵さんのエピソード >

茶室の中に梧陵さんの足跡

この程、お見えになった濱口家の子孫の方からビッグなニュースがもたらされました。『濱口梧陵記念館』として使用している旧濱口家住宅は、大正4年に火事で焼失し、5年に再建されたということです。ところが、この時茶室だけが焼け残ったという証言がありました。



ということは、『梧陵さん』もこの部屋でお茶をたしなんだ、ということでしょうか。ひょっとするとこの部屋で、『関 寛斎』さんと夜を徹して話をしたのでしょうか。『関 寛斎』さん、徳島の蜂須賀家の御典医をしていた時、暇があれば広村に来て、『梧陵さん』と話をしたそうですから。

夢が広がりますね。皆様もお越しただいて感じてみてくださいね。

oooooooooooooooooooooooooooooooo

「地震対策技術展」へ行ってきました

大阪で「地震対策技術展」が初めて開催されました。「稲むらの火の館」へも案内状がきましたので、行ってきました。耐震・免震技術、緊急地震速報機器、災害トイレ、非常食、シェルター等々の新しい技術展でした。出来るだけのパンフレットを、もってきています。見たい人はどうぞ。



東京に江戸時代から有名だった須原屋という本屋がありました。之は三都書林の第一に数えられ、その本家は広の隣村湯浅にあって豪家の一つですが、梧陵さんとは親戚の間柄でした。その処の主人茂兵衛さんというのは、若い時から贅沢に育った為、いつまでもその習慣が抜けないうででしたが、ある時国にいた時、梧陵さんがこの茂兵衛さんをワラビ狩りに誘ったのです。そして梧陵さんの言うのには、弁当の用意は、こちらですからの事だったので、茂兵衛さんも大喜びでした。その日になると梧陵さんは一人の丁稚に弁当を背負わせ、茂兵衛さんと連れ立って早朝から、山へ登って彼方此方ワラビを採って歩いたのです。朝早くから山歩きをして、昼頃になっても梧陵さんは昼飯を食べようとしない。茂兵衛さんはもう堪らなくなって、懇願するように、早く御馳走を食べさせてくれと言うが聞かない。やつの事で、梧陵さんが弁当を開けさせたのを見ると、中から出たのは麦飯の握ったのと沢庵漬があるばかり。梧陵さんの御馳走だから、どんなうまいものがあるのだろうかを待っていた茂兵衛さんはがっかりしてしましたが、食わずには居られませんし、食べてみれば腹が減っているからうまい。すると梧陵さんは四方を眺めながら、こうして食べると握り飯も実にうまい。人間は働いて食うと何でもうまいし、働かなければ物の味は分からないと話したので、茂兵衛さんもおおいに知ることが出来たという話です。

.....

津木中学校の「ホテルの研究展」

ありがとうございました

5,6月の2ヶ月間、津木中学校の「ホテルの研究」を展示していただきました。来館者は大勢見てくれて、感心していましたよ。

(裏の二面もみてください)

広川町	< 稲むらの火の館 >	第51号	いざという時
2面	やかただより	H26・7	あなたは！

安政元年海嘯の実況

濱口梧陵手記

依って従者に退却を命じ、路傍の稲むらに火を放たしむるもの十余、以て漂流者にその身を寄せ、安全を得たるもの少からず。斯くて一本松に引き取りし頃轟然として激浪来り、前に火を点ぜし稲村浪に漂い流るるの状観る者をしてうたた天災の恐るべきを感じしむ。波濤の襲来前後四回に及ぶと雖も、蓋しこの時をもって最とす。

それより隣村の某寺院に至り、住僧に談じ貯うる処の米穀を借り入れ、直ちにこれを焚きて握飯となし、八幡境内その他各所の避難所に配賦し、僅かに窮民の飢餓に充つ。然れども限り有る米穀を以て数日を支



うる能わざるを察し、深夜馳せて隣村の里正(今の村長)某を叩き、情を告げて蔵米五十石を借り受け、翌日の準備をなす。

六日、風静かにして日暖かなり。東方の白むを待ち、八幡鳥居際より全村を望み、被害の度、夜来の想像より稍軽少なるを知れり。然れども漁舟の覆りたるあり、樹木の根より抜かれたるあり、又田面には屋材家具の流散するあり。行くゆく人家に近ずけば流材の堆積愈々甚だしく、鳶口を杖にしてその上を踏み越え、海浜に出でて眺むれば、潮水漣波なくして油を流したるが如く、平素に異なれり。而して其の間に漂舟流材は汚物を混じて浮べるを見る。海岸に沿うて西に行けば人家は概ね流失または崩壊して、唯二三の旧態を存するにあるのみ。ああ、幾百の人烟一夕潮流の掃蕩する所となる。人生の悲惨ここに至りて極まれりというべし。長嘆未だ半ならず、強震として来る。

余驚きて倉皇高地に向って疾走し、遂に被害地の視察を終らずして避難所に帰り、施米炊出しの事を見る。抑々八幡境内と隣村の一寺内とを以て避難所に充つると雖も、ただ、地上に畳をならべ、戸障子をもって之れを囲いたる露宿に過ぎず老幼の内に漸く膝を支うるの憂苦離散の実況は、人をして断腸せしむるに余りあり。「身を殺して仁をなす」は平素志士の扼腕して講ずる処、誰か惻隱の情を奮起せざる者あらんや。避難所はかかる体裁にして、到底雨露を凌ぐ事能わざるを以て、再び隣村の里正に至り、仮小屋建設の件を依頼し、その承諾を得たり。(つづく)

<お客様の声>

① 貴館にお邪魔してから一週間が過ぎましたが、濱口梧陵の偉大さはもとより一所懸命、子孫のためにと堤防を築いた村の人々の偉大さにも気が付いたところです。今を生きる私たちも、将来に向けて何が出来るのかと真剣に考えたいと思う毎日です。(関東方面からお越しの男性からのお礼状)

② 広村堤防に植えられていた黒松のことを調べに来ました。黒松がこんなに無くなっていたのにはびっくりしました。黒松は潮に強いのですよ。

大日本山林会の資料には、広村堤防の黒松のことがかなり詳しく載っているのですよ。資料のコピーを送ります。

(東京から来られた男性)

③(団体で来られた中の女性) 梧陵さんってお金持ちだったんですね。(同行の男性) お金持ちだけど、他の人はこんなに社会のためには使わないですよ。(女性) ああそうですよね、すごい人ですね。

(若者たちを引率されてきた男女)

④ よく、いろいろ学びました。べんきょうになりました。(女子小学生)



◎広川町の避難施設

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館／津波防災教育センター
〒643-0071 住所 広川町広671

TEL : 0737-64-1760 / FAX : 0737-64-1761

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamurano-hi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日・火曜日(祝日開館)

年末年始(12/29~1/4)

*記念館だけの入場は無料です。